フィールド（現場）からの風 ㊺1

宮田守男

12日に東京都に4度目の新型コロナウィルス緊急事態宣言が来月22日まで発令された。緊急事態宣言下で開催される異例の五輪。一部競技を除いての無観客開催。観戦を予定した多くの人は、ホテルなどの宿泊や移動手段のキャンセル対応に追われた。だがキャンセル料金が発生したケース情報もあり、今後の課題になって行くのだろう。

大北地域の観光にも緊急事態宣言は大きな影響を生じるのだろう。学生の夏合宿などの団体キャンセルは、期待していただけに落胆も大きい。春シーズンの修学旅行も秋に日程変更された場合も多く、「秋には期待している」の言葉に切羽詰まった悲壮感が推察できる。

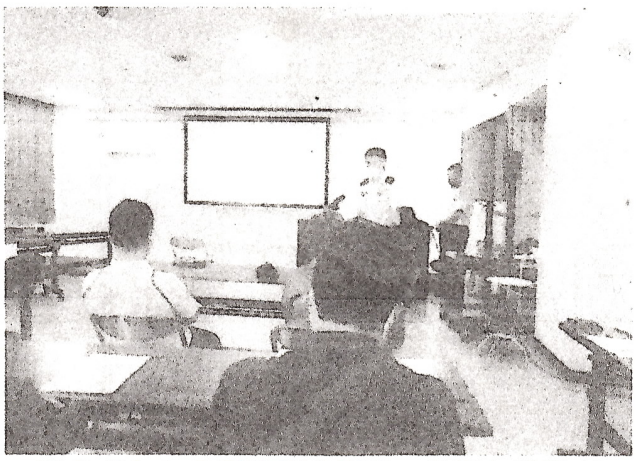
7月初旬に白馬村役場会議室で開催された白馬村自衛隊協力会総会に参加する。自衛隊の関係者に会いたいとの思いからか多数が参加。事あるごとに自衛隊に対して存在そのものを否定する言動が聞かれる中、大災害発生時には、命の危険のある現場に自衛隊の出動要請。災害現場には頼れる組織だ。

平時での自衛隊との連携が求められる

総会終了後の陸上自衛隊松本駐屯地伊藤指令の長野市の千曲川を決壊させた「平成元年度東日本台風」への災害派遣の講話で、改めて自衛隊の担当した活動の規模に驚かされた。

話を聞きながら長野オリンピック・パラリンピック当時の自衛隊の活動を思い出す。クロスカントリー会場の造成では、建設費低減を図るため一部工事を自衛隊に委託。一期工事の作業隊は4県4駐屯地から80名の隊員、建設機械7台とダンプトラック32台。翌年の2期工事の作業隊は3駐屯地から74名、建設機械7台、ダンプトラック28台の編成。オオタカ等への騒音軽減対策などの作業時間の規制などに対応のため、平日の残業や休日作業の実施など過酷だった。

また気まぐれな天候に翻弄された競技会場。陸上自衛隊の関東一円から選抜された1100余名の協力隊。作業の過酷さは今でも語り草だ。ノルディック協力隊長鈴木軍三さんの「何を、いつまでに、どの程度」さえ指示してもらえれば必ず実行する集団が自衛隊との言葉がいまでも鮮明に思い出す。自衛隊に災害要請する時に、この原則は忘れてはならないし、災害時だけでは無く、平常時も常に自衛隊とは情報共有して行かなくては、と出席者皆が感じたはずだ。（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）



配布された自衛官募集資料。多様な職種が「人材」を求めている